

中央大学とオリンピック

森 正 明

はじめに

2014年6月23日(月)に、2020オリンピック・パラリンピックの大学連携締結式が早稲田大学大隈講堂で実施された。日本の552(2015年5月現在775大学)の大学が締結し本学もこの締結を受けて、今後の具体的な取り組みについて各部署で検討を開始した。

保健体育研究所としては、研究チーム「2020オリンピック・パラリンピック研究班」を立ち上げ、5月から学長専門員の下に開始した「スポーツ振興ワーキンググループ」のメンバーも所属した。その後、パラリンピック関連の研究、開催都市健康プログラム研究、語学ボランティアに関する研究につながる研究員が加わり現在6名の研究チームとなった。

今回は主査である筆者が、研究班を代表して大学連携前後の取り組みおよびこれまでの関連行事の実施、そして今後のビジョン等を明示する。

さらに、これまで多くのオリンピックや近年はパラリンピアンを輩出してきた中央大学とオリンピックの歴史を振り返る。

目 的

1964年開催の第18回オリンピック東京大会から50年目を迎えた2014年に大学連携が締結された。この締結で本学が取り組んでいかなければならない課題や可能性について、現時点までの取り組みと今後のビジョン、そしてこれまでの中大オリンピックの活躍について事例を示し考察する。

大学連携までの経緯

2013年9月ブエノスアイレスにおいて2020年オリンピック・パラリンピック（以下、2020オリ・パラ）の東京開催が決定した。

2013年から2020オリ・パラに向けた招致活動の一環で全国の大学にオリンピックムーブメントを普及、推進することが決定された。この統括機関である日本オリンピック委員会（以下、JOC）から全国の大学長宛に2020オリ・パラ連携への締結要請が行われた。

本学も2013年6月から正式に加わり9月の開催都市決定までのJOC活動への協力を行った。さらに2020オリ・パラが実現しないことがあってもこのムーブメントをどのようなかたちで大学教育やその他学生の活動と連携させることができるかという課題の検討も始めた。

例えば1964年の東京オリンピックの数年前から、オリンピックムーブメントの一環でオリンピック教育が始まり、当時の多くの小学生は近代オリンピックの創始者であるクーベルタン男爵（仏）のことを国語の伝記として学んだ。その他、社会科では参加国の国旗や地域の場所や気候等についても学び、首都の確認の中でブラジルのブラジリアやオーストラリアのキャンベラ等の計画都市（首都機能のための都市づくり）についても学んだ。

近代オリンピックが他のスポーツのビッグイベントと異なる取り組みをしてきた100年以上の功績についても再考する機会として、今回の2020オリ・パラの果たす役割の大きさをこの大学連携は担っている。

中央大学の取り組み（案も含む）

本学の2020オリ・パラに向けた取り組みでは事務局としての学事部がその所管となる。学事部としては事務局管として教学を中心にした取り組み全体の統括を果たす役割を担い、様々な企画・立案に対する予算措置や職員部署の企画・立案の支援も果たすことになる。この最初の連携事業として首都大学東京（旧、東京都立大学）が1964東京オリンピック開会式50周年記念シンポジウムを10月10日に南大沢キャンパスで行うことが決定し、その協力依頼を受けた。特にオリンピックでシンポジストを担当できる選手の紹介と川淵三郎現首都大学東京理事長共々合同シンポジウムに参加する教員の2名の依頼を受けて、千田健太（フェンシング北京、ロンドン五輪出場、2014アジア大会団体金メダリスト）選手に参加依頼をし、教員は筆者が参加した。オリンピック・パラリンピック教育の一環ということもあり、文学部の体育、スポーツ関

連授業学生約40名の参加もあり、シンポジウムに対するレポート提出も実施した。1984年のロスアンゼルス五輪以降、世界のプロスポーツの最高峰の大会となった近代オリンピックの創世記からの歴史やオリンピック・パラリンピック教育の意義について考えさせる良い機会となった。

これからの取り組み（案）であるが、附属の中学、高校に対して本学のオリンピック、パラリンピックの参加者の事例やその大会での活躍や当時の社会との関わりなど、まさにムーブメントの目指す指針に沿った活動を考えている。

特に中央大学附属高校のバレーボール部、バスケットボール部出身者のオリンピックの活躍については、高大一貫の指導体制、選手の育成対象の事例として研究テーマの一つでもある重要な取り組みであるといえる。

また、多くのオリンピックを輩出してきた本学の体育連盟出身の選手たちの記録を掲載している「中大スポーツ」（学員体育会が毎年発行）をもとに、オリンピックに出場した選手の方々への面接調査（インタビュー）を実施していくことも重要なテーマである^(註1)。

このテーマに関連して、今後現役大学生を含めたオリンピック、パラリンピックを目指す選手の競技力向上のためのマネジメント（トレーニング面、メンタル面、奨学金等の資金面等）の体制作りも欠かせないテーマである。

本研究チームも、研究員のテーマごとの研究を進めるとともに2020オリ・パラテーマとリンクする共同研究を企画していくことになる。

「中大スポーツ」のオリンピック選手成績一覧表から

日本の近代オリンピックの初参加は、第5回ストックホルム大会で3名の選手団（団長嘉納治五郎、金栗四三選手、三島弥彦選手）であった（マラソンに出場した金栗選手は、箱根駅伝の開始に尽力した一人として有名）。

本学のオリンピック初の代表選手は、第8回パリ大会の田代菊之助（陸上）という掲載があるが詳細は書かれていない。

今後の出場選手への面接調査等も含め紀要のテーマとして継続研究を行う予定なので、今回は高大一貫の成功事例としてバレーボールを中心にバスケットボール、ハンドボールの3種目に限定して選手の活躍とその背景について考察する。

近代オリンピックにバレーボールが正式種目として採用されたのは1964年の東京大会からである。金メダルを獲得した「東洋の魔女」があまりにも有名になったために男子のバレーボー

ルは注目度が低かったが、この大会で銅メダル、1968年のメキシコ大会で銀メダル、1972年のミュンヘン大会で金メダルと世界の頂点を極めた種目でもある。特にメキシコ大会とミュンヘン大会、モンテリオールの主力選手（各々、小泉功・島岡健治、島岡健治、島岡健治・丸山孝）は、全員中大附属高校（以下、中附）、中央大学というバレーボールの一貫体制の中で育ったスーパースター達でもあった。これらの選手たちは全国各地の中学時代から注目された選手で、その進学先が中附で全国制覇を果たし、その後中大に進学して大学日本一のみならず社会人チームも含めた全日本選手権でも3連覇を含む偉業を成し遂げた。中附の中村監督、大学の橋本監督という一貫指導体制のもと、全国の有望選手が中学時代から中附、中大を目指し、代表チームにあっては東京大会から監督を務めた松平康隆監督（慶応OB）のもとで国内合宿、海外遠征に家族同様の雰囲気で行われた。当時「松平一家」といわれそのナショナルチームの主力を中大スポーツの一員が担っていた歴史をこの資料は物語っている。

男子バレーボールチームが金メダルを獲得したミュンヘン大会では、バスケットボールで得点王になった谷口正明も中附、中大という一貫体制の中で育った選手であった。ミュンヘン大会では、全体で14位という成績であったことを考えると谷口正明のシュート力は世界でも群を抜いていたことを示している。またミュンヘン大会から正式競技となったハンドボールでも中附の時代から全日本の合宿に召集されていた蒲生晴明がモンテリオール（1976）ロスアンゼルス（1984）大会の代表選手を務め、その後全日本の代表監督も務めた。こうした選手たちが全て中附、中大という一貫体制の中で育ってきたことを考えると多様な領域で高大一貫の取り組みが行われている現状に多くの示唆を与えている。

スポーツにおける附属高校との一貫体制では、関西学院高校や慶應義塾高校の事例が新聞でも取り上げられ、勉学とスポーツの両立を目指す中学生が集まってきている事例が紹介されている（資料1）。この事例は正課、課外の両面に配慮した教育事例の一例であり、本学の昭和40年代から実施していた高大一貫の領域において、全国の私学が高大一貫の取り組みを実施しようとする現状に多くの示唆を与えている。バレーボール部、バスケットボール部等の取り組みは成功事例でもあるので、2020オリ・パラを目指して再度検討していく重要な課題であるといえる。

このような高大一貫体制を作ることができれば、関連する試合の応援に行くことや、直接応援するチアリーディングやプラスコアなどのサークル活動とのつながりも作ることができ、いわゆる「応援文化の醸成」に機能する。大学が発信している「オール中央体制」の確立のためにも今後具体的な検討が必要な時期にきているといえる。

資料 1

潮流

野球留学のいま

付属人気

2009. 6.23. 朝日(朝刊)

「甲子園も有名大学もめざす」

青々とした芝生に、軟らかな黒土。心地いい振風がスッと通り抜ける。5月9日。全国の高校球児のあこがれの甲子園で、関西学院高（兵庫）と関大一高（大阪）の練習試合があった。ともに有名私大の付属高。関西学生野球の土を踏む機会に恵まれた。両校とも春夏の甲子園出場の実績があり、ほぼ全員がエ

スカレーター式で大学に進学できる。関西学院高の野球部には毎年30人以上が入り、今は118人の大所帯。広岡正信監督(55)は「全員が練習できる方法を考えるのが大変」。副主将の高尾慶城(3年)は関学大までの一貫教育にひかれ、関西学院中を選んだ。中学時代に硬式のヤングリーグ(兵庫伊丹)で全国優勝。高校進学時には、より甲子園出場に近そうな強豪から誘いもあったが、断った。一方、関西学院中で一緒に全国優勝した宮本真吾(3年)は兼徳学園高(兵庫)に進み、今春の選抜大会に出た。夢をかなえた親友をうらやましく思いつつ、高尾は「関西学院で勉強がしたかったし、まだ最後の夏がある。後悔はしていない」と先を見据える。

少子化の時代にあつて、全国の硬式野球部員数は増加の一途をたどる。昨年5月末で約17万人。特に都市部で増えていて、例えば東京では98年と比べて都高野連の加盟校数が増え、部員数は1851人増えている。

富山・新湊南部中出身の明大賞(2年)が額元を離れて慶応高(神奈川)に進んだのは「大学まで野球をやりたい」という思いからだ。父の隆之(さん46)は「甲子園への意識は特になが、慶大に行けるのが魅力だった」と打ち明ける。関東では早大、慶大、明大、法大、立大、日大、東洋大、駒大……。関西

なら関大、関学大、同志社大、立命館大……。有名私大につながる高校の野球部が、甲子園と進学の二つの目標を追い球児を引きつけ、実力を著実に伸ばしている。

過去5年の夏の甲子園に出場した延べ2511代表校のうち、大学の系属高・付属高は約2割を占める。選抜大会の21世紀枠特別選考委員で、ノンフィクション作家の後藤正治(さん)は「これは野球部だけに限らない傾向で、止めることはできない」と話す。

今年も高校球児の夏の戦いが始まった。甲子園をめざして、越境したり、額元を離れたり。海外からの留学生もいる。少子化と不景気の中で、高校も生き残りの道を探る。野球特长生も条件付きで募集された。そんな「野球留学」の現場を訪ねた。



関西学院高の選手たち。胸には校章が輝いている

出所：2009年6月23日 朝日新聞（朝刊）

ま と め

本研究では、2014年7月に研究班を立ち上げた2020オリ・パラ研究班の現在までの取り組み内容と今後の取り組み方針についてまとめた。

そして中央大学出身のオリンピックの事例を、中附との高大一貫の視点から「中大スポーツ」に紹介されている選手達とその指導体制、そして社会的な影響についても今後につながる視点から提言した。

今後は、本学出身のオリンピック、パラリンピアンへの面接調査（インタビュー）を実施することとともに研究員独自の研究テーマの調査等も行っていく予定である。

注

- 1) 毎年発行されている「中大スポーツ」は、学会会の支部という位置付けで活動している学員体育会の機関紙である。現会長は高木丈太郎氏（空手部OB、元三菱地所会長）が務めている。

文 献

- R. A. スミス・白石・岩田監訳（2001）カレッジスポーツの誕生。玉川大学出版部。
中大スポーツ編集委員（2014）中大スポーツ2014。中央大学学員体育会。
刈谷富士雄（2014）NHK解説委員室編、動き始めた東京五輪。NHKニュースのキーポイント2015年版。
p. 187。
朝日新聞（2009）付属人気「甲子園も有名大学も目指す」潮流、野球留学のいま。